

Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2021年12月1日 第7号

巻頭言 知恵の初め

DPC 所員 石居 基夫



挿画:『町の教会』 故 小川滋氏

近年、「スピリチュアリティ」への関心が高くなっている。「スピリチュアル・ペイン」「スピリチュアル・ケア」。これらの概念は、長く終末期医療や緩和ケアといった「死」に向かい合う方々に関わる医療現場の中で用いられ、深められてきたものだが、今はこうした特定の現場に限定されなくなってきている。

高齢社会という大きな背景や、度重なる自然災害や深刻な感染症の拡大などの影響もあって、末期癌や進行性の難病に限らず、誰しもが人生の終焉について意識せざるを得ない状況と不安が広がっているのかもしれない。

今日では、医療や福祉の制度が整えられ、病院や施設という場所にこだわらずに在宅での生活においても必要な支援を受けることができるようになってきた。大切なことは、制度についての知識を持つばかりではなく、実際に支援を受けるために、家族も含めて納得し受け入れる心の備えなのかもしれない。「スピリチュアリティ」とは、最期の時までを生きるために必要な深い心の備えであり、またそれを働かせる知恵のことなのだ。私たちは自分の限界を思いながらも、なかなか

他者の支援を受けることを「いさぎよし」としない。まだ自力でなんとかしたい、という思いが先立つのだ。しかし、創造の初めから、神は私たちをご覧になられて「人が一人でいるのはよろしくない」と助け合う存在を与えられたのだった。だから、私たちには謙遜に「助け」を受け取って生きる「知恵」が必要なのだと思う。

聖書には、「主を畏れることは知恵の初め」という言葉がある。

「死」を目前にして、己の限界や小ささを知り、 生きる意味や不条理を問い、たくさんの後悔とと もに自らのいのちが与えられた不思議を思うと き、私たちには自らのうちに確かな答えは何もな い。そして、深い嘆きが心を捉えていくものだ。

それでも、その嘆きも痛みも知っていてくださるお方があることを畏れつつ知ることは、何よりも私のこだわりを手放し、「いさぎよく」生きる力となるのかもしれない。自分の自己実現ではなく、与えられたいのちを誰かと共に生きることの真実の中に委ねていくための柔らかなる知恵を求め、詩編の作者のように、嘆きを感謝へと変えていく言葉を紡ぐ者でありたい。



今、『寄り添い』を考える

DPC 所員 堀 肇

言葉としては特段新しいものではありませんが、最近コロナ禍という背景もあってのことでしょうか、新聞記事などに「寄り添い」という言葉が頻出するようになりました。記事のタイトルだけでもかなり多く、私は仕事の関係もあって、ある頃から関連する記事を切り取るようになりました。

それらの記事を読みながら、この「寄り添い」という課題について、私たちキリスト者はこれをどう考え、どう実践すれば良いのかを、今、このような時代だからこそ改めて問い直す必要性を感じたのです。

1. 寄り添いの本質

「寄り添う」とは、ごく一般的な意味では相手の「そばに寄る」とか「離れないで一緒にいる」というようなことなのですが、それは物理的・身体的な意味だけでなく、当然精神的な意味も含めてのことです。実際にこの言葉が使われる場合、それは人が苦しみに陥っている時などに、その辛い気持ちを汲んで共にいてあげるというような態度を指しています。

しかしこの「寄り添い」も、苦悩のレベルが深くなりますと、実際には簡単なことではありません。対人援助職の専門家ならよくできるのかと言いますと、必ずしもよくできるとは言えません。ある程度は訓練された技術や知識を活かして精神的援助ができても、人間の苦悩は奥が深く援助は難しいのです。

これは私の経験による実感でもありますが、 人の悩みの奥深くには神秘とも言うべき領域が



あって、人間は皆その人にしか分からない悩み 方で悩んでいますから、第三者は分かりようが ないと言っても良いかと思います。

ではどうしたらよいのでしょうか。それはたとえ分からなくても分からないまま傍らにいることです。苦悩が深くなればなるほど言葉というものも無力なものとなり、誰かがそばにいるという、つまりそれまで以上に存在そのもの、「存在の仕方・内容」が重要になってきます。これは言葉を変えて言えば、魂の「同伴」と呼んでもいいかもしれません。

C・S・ルイスが最愛の妻を亡くした時のことをこう書いています。『私はだれの言うこともまるで興ざめだ。それなのに、私はほかの人たちがまわりにいてほしい。…私に話しかけずにいてくれるだけだといい』と。「存在」のしかたが問われているのです。寄り添いもここまでくると非常に難しいと言って良いでしょう。

しかし私たちは、寄り添いの最大のモデルを 永遠の同伴者であるイエス・キリストの中に見 ることができることを思い起こしたいのです。 これは無力な私たちにとって最大の慰めです。

2. 寄り添いの双方向性

この「寄り添い」についてうっかりすると忘れてしまうことがあります。それは「寄り添う人」と「寄り添われる人」との関係性を巡る問題です。現実には牧師と信徒、またカウンセラーとクライエントなど、つまり助ける人と助けられる人という上下関係のような構造があります。これは牧会や援助の現場においては制度上

からも当然のことなのですが、事柄の本質を考えると、「寄り添う人」も実は「寄り添われる人」なのです。つまり寄り添う人も病み得る存在であり、助けを必要とする人間だということです。人は皆「私は健康な人・ケアする人」、「あなたは病気の人・ケアされる人」と単純に二分できる関係ではないということです。

この関係性について、はっとさせられた経験があります。もう十数年も前のことですが、大学の食堂でT先生と一緒に食事をしている時のことでした。先生が私の専門について興味を示されいろいろと質問をされたのです。話題が「ゼール・ゾルゲ」(一般に「魂への配慮」と訳される)に及んだ時のことです。T先生は「それは「魂への配慮」ではなく「魂の配慮」と訳した方がいい」と力説されたのです。つまり配慮とは単に他者の魂「への」配慮ではなく自分を含めての魂「の」配慮だというのです。自分も一緒だということなのですが、大力ではない。

これは、牧会配慮の本質をついた指摘であって、体験としても十分納得できることでした。 私自身の事を振り返ってみても、牧会者として今あるのは、被牧会者である信徒の方々の存在によって支えられてきたからですし、また問題を共に考えることによって、どれほど教えらられてきたか分かりません。これは単に牧師と信徒の関係だけでなく、日常生活においてケアするとか寄り添うというのは、力のある者が力のない者へ一方的に手を差し伸べるというのではなく、こちらも相手によって助けていただくという、いわば双方向的なものなのです。寄り添う人は自分もまた寄り添われる人でもあることを忘れないようにしたいのです。

3. 寄り添い方の本質

寄り添いについて、もう一つ触れておきたい ことは「寄り添い方」です。これは結論から言 えば、いかなる知識や技術を持っていても、そ れによって良い結果が出るとは思わないことです。こちらが相手のためにと思っても、相手はこちらの援助を望んでいないかもしれません。これについて深い気づきを与えられたのは『コンパッション』(女子パウロ会)に記されているヘンリ・ナウエンの言葉でした。彼は次のように記しています。

『人を変えたり、その行いに影響を与えたり、 新しいことをさせたり、新しい考えを持たせるような方法や技術を山ほどもっているとき、お互いがそこにいっしょにいるという、簡単そうに見えて実はたいへんな賜物を失う場合が多いのです。 自分がそこにいる以上、何か役に立たなければと信じこんだばかりに、この賜物を失う羽目になるのです。(中略)

わたしたちが慰めや安らぎを感じるのは、往々にしてお互いにとって「役に立たず」、控えめで、慎ましくそこにいることなのだということを忘れています(20ページ)。』

心を支えるための知識や技術を持っていることそれ自体に問題があるわけではありません。ただ、そういうものを役立てて何かをしようと思っていると、相手は治療やケアの対象になってしまい、「お互いが一緒にいる」という、つまり心と魂に寄り添うという世界を失ってしまいやすいのです。これはナウエンがこの文章の後にも記しているように、とても難しいことですがほんとうのことなのです。彼は『他者の弱みを分かち、その人の弱点や無力さから生ずる体験にあずかり、その頼りなさを自分のものとし、自分で支配したり、決定することを放棄する』ことだと言うのです(20ページ)。

まさに「寄り添い方」の核心をついた洞察です。それはパウロが言う「泣くものと一緒に泣く」ということ。また何よりもそれはイエス・キリストがその生涯を通じて示されたコンパッション(苦しみを共にする)の世界です。これこそが「寄り添い」の本質ではないでしょうか。



たましいの安らぎ

一死を前にした人との関わりの中から一

本年のデール記念講演会は淀川キリスト教病院チャプレン藤井理恵先生を講師にお迎えして開催されました。先生は同病院で 30 年間チャプレンとして働かれ、そして現在もその任にあられます。人の霊的痛みに同伴してこられた先生がスピリチュアルケアをどのように捉えておられるか、その実際をうかがうたいへん貴重な機会となりました。豊かな示唆を伴って聴く者の心に届く藤井先生のご講演をまずもって感謝いたします。ここにご講演の内容をできるだけお伝えいたしますので、どうぞお読みください。

(DPC 所長 齋藤 衛)

I. たましい (スピリチュアル) とは?

人は誰しも「たましいの痛み」があるというお話から始まりました。人の存在の領域を身体的・精神的・社会的・スピリチュアル(霊的)の4つの領域に分けるなら、中でもスピリチュアルな領域は「何によっても埋められないこと」を抱え、「何のために生きるのか」など「自分の価値への問い」がなされるところ。これが「たましいの痛み」となると。

Ⅱ. たましいの痛み (スピリチュアルペイン)

たましいの痛みがなぜ生まれるか。それは do(行為)の世界で生きる者が、この do を失うことによって be (存在) への問いかけが始まることによるとされました。死を前にして人は苦しみます。これまで生きてきた do の世界が通用しないのです。そこで問わざるを得なくなるのは、苦しみの意味への問い、生きる意味への問い、価値への問い、孤独、限界、罪責感、死と死後の不安だとあげてくださいました。そしてその痛みに寄り添い関わるとはどういうことなのか。

Ⅲ. be として be に関わるということ

「be として be に関わる」。この言葉を印象深く聞きました。私たちのかかわりや共感には限界がありながらも、しかし、こちらが be であることの大切さを示されました。これが人とのかかわりで形作られる「水平(ヨコ)の関係」。ただし、人が痛みから解かれてゆく過程は、その「水平の関係」から「垂直(タテ)の関係」に気づいてゆくことだと。

先生の見いだされたチャプレンの役割とは、水 平では解決できない問いに対して、垂直を示す役 割であるとされました。これは決して宗教を押し つけるということではなく、永遠や人を越えた存 在に心向けることを言います。人はこの垂直の関 係を得てこそ、自身の存在の尊さを受け止めるこ とができる。ここでは先生が体験された何人かの 方たちとの関わりをお分かちくださいました。そ れらは、ご自身の人生に価値も意味も見いだせな かった方が、神様との関係を得てご自身の存在の 喜びを得ていった事実でした。実に神様と出会う ことによって初めて自分の存在そのものを感謝 して受け止められた、その証をお聞かせいただきました。

垂直の関係から生まれてくるものは、自己相対 化です。つまり生かされているという気づきであ り、さらに自分を越える存在へと向かう思いが祈 りであるとされました。痛みや孤独で混乱した自 身のたましいを、神様の視点で受けとめていく時、 生かされていることの感謝や自分を生かす存在 にすべてを委ねる生き方が生まれます。

まとめとして先生は水平の関係を尊いものとされました。そのつながりによって私たちは支えられ励まされる。しかしこれには限界があり、その限界の時、垂直の関係による包みこみからいのちや人生を見るなら、そこにbeが見つかる。beとして肯定され、赦され守られ愛されている自分を知るでしょうと。

Ⅳ. スピリチュアルケア (たましいのケア)

ご講演の終わりに、スピリチュアルケアについて教えてくださいました。ケアの方法論を追求するのはケアに携わる者も do の誘惑にさらされていることです、と。先生ご自身が患者さんと向き合う中で無力な自分を感じてこられた。しかし、そんな be でしかない自分だから be でしかない患者さんと出会える。たとえ何もできなくても肯定された存在として be そのもので関わられるとのこと。あとは神様に委ねて関わることが大切だと思っています、と。

このことは、ご著書『たましいの安らぎ一病院 チャプレンの歩みより一』(後掲)のあとがきに書 かれている先生の言葉を私に思い起こさせまし た。

「今、約三十年の働きを振り返ってみると、私が教えられてきたのは、『自分が"何者かであろうとする"のをやめる』ことでした。」

(同書 184 ページ)

何者かであろうとしないのは、とても勇気のいることと思います。何者かであろうとすることか

らなかなか抜け出せないのが私たち。しかしそこで手放すことがスピリチュアルケアの鍵と知ら されました。

先生はこれまで魂の痛みを抱えた方と数多く 出会われ、そこで人生を受け止め直す姿や、生き 直そうとされる姿、感謝される姿に多く触れてこ られました。これこそがたましいの安らぎであり、 この場面に触れてこられたことは何よりの恵み であったと、締めくくられました。



講演に続いて、DPC 所員二人が藤井先生のお話への応答をしました。藤井先生からいただいたコメントも含めその一部をご紹介いたします。

小嶋リベカ所員より、コロナ禍でもあり時間的にも限られた状況の中で家族へのケアをどうされているかという質問。藤井先生からは、ご家族の悲しみから受け取っているのは大切な人を失ってしまう悲しみであること。しかしいのちは失われるのではなく断絶もされない、神様にお返しするのだと受け止めること、神様が結ばれたきずなは断たれないことをお伝えする時、そこに希望を見い出す方は多い、とのお話をいただきました。

堀肇所員は死を前にした方との関わりについて以下のように質問、それぞれにお答えいただきました。

スピリチュアルペインが見出される時のしる しや共通点は何かあるか、どんな時に呼ばれる か?

藤井先生のお答えは、キリスト教への関心があるとの求めがある場合、あるいは治療拒否など病気の自分を受け止められなかったり罪責感などを抱えていると思われ、医療者では対応できない場合の大きく二つの場合に呼ばれていると。

赦されていると言われてもそうは思えないという方にどうお話したらよいだろうかという問いに対して。

神に赦されていると思えないのは、自分で自分を罰し続けているからだと思われる。自分が自分を赦せるためには、自分の存在自体が自分を越える存在に肯定されていることを受けとめること。また、その方を思っている者がいること、そしてその背後には神様がいるということを知っていただきたいと願いつつ、一緒に祈りながら歩むほかにはないというお話をいただきました。

チャプレンとして同伴されている中でいちば ん気を付けていることはどんなことかという問 いに対して、こうなってもらいたいという思いを 持たない、成果を求めない。相手に変わってほし いという誘惑や相手の心を操作するような思い は捨て、何もない自分だからこそ、そこに神様が 働いてくださると思っているとのお答えをいた だきました。

短い時間ではありましたが濃い内容の応答をいただき感謝します。



今回の講演会では、会場(参加者)からのご質問にその場でお答えすることが難しく、オンライン上で多数いただいたご質問をご紹介することもかないませんでした。後日藤井先生にいただいたご質問をお送り申し上げたところ、快くご丁寧なお返事をいただきました。そのうちのいくつかを以下にご紹介いたします。

【質問1】苦しむまま亡くなられた方を医療者と してどう解釈したら良いか。

【回答】その方について「解釈」することはできない、また解釈しなければならないものでもない、と思います。その理由の一つは、その方の最後の心の内を私たちが知ることはできないからです。(中略) 私たちにできることは、その方との一つひとつの関わりに丁寧に心を込めていくことではないでしょうか。その方の人生の最期が、私たちの目にどのように映るのか(良し悪しの判断)

よりも、その時その時の関わりを大切にすることではないかと思います。そして精一杯関わったそのあとは、私たちの思いを垂直の関係性の中で委ねることだと思います。

【質問2】(質問1続き)不全感の残る症例についてどうお考えか。

【回答】まず私たちには限界があることを認めることが必要だと思います。私たちは患者さんの苦しみを理解することにおいても、スピリチュアルケアに携わることにおいても、その力には限界があります。

死を前にした方が自分に限界を感じ苦しむ時、あるいは人との関わりではスピリチュアルな問いに答えを見つけられない時には、人(自分や他者)を越えた垂直の関係性が必要になってきます。同じようにケアする者も、自分の限界を知る時、それを委ねる垂直の関係が必要だと思います。

当院ホスピスでは、毎週月曜日の朝に、前の週に召された方々のお名前を読み上げ、チャプレンが祈り、そのあと黙祷の時間を持っています。この時間はスタッフそれぞれが亡くなられた方のことを思い、また自分のケアについても思いを巡らし、それを何かに委ねる時間です。十分なことはできなかったという思いがあるでしょうが、それぞれが精一杯関わったと思います。その自分をを受けとめ、この場(緩和ケア病棟)に自分を遣わした存在に、自分をを委ねていくことです。

もしケアに携わる者が、限界を認めない場合、 患者さんとの関わりが満足できるものであれば、 自分の力ややり方によるものだと傲慢になり、満 足できなければ、自分には力がなかったと不全感 を抱くことになるでしょう。これはある意味 do の 追求にも繋がるものだと思います。

とは言え、どんなにケアをしても何らかの後悔 は残ることと思います。それはどんなに尽くされ たご家族でも後悔されているのと同じで、患者さ んへの思いと愛が深いが故の後悔でもあるかと 思います。それも含めて委ねること、祈ることは ケアする者にとっても、大きな支えになると思っ ています。

【質問3】牧師として傾聴ボランティアの奉仕を

している。「宗教は要らない」と拒まれる患者さん

に対してできることは、寄り添う(横の関係)ま でだろうか。自分としては、縦の関係に気づいて ほしいという願い(これも do)を求めてしまう。 【回答】患者さんが「宗教は要らない」と言われ る場合、それは教義を中心とした宗教的関わりで あることが多いと思います。私も病院で次のよう な言葉を聞くことがあります。「病気になった途 端、いろんな宗教の人がやって来て"これを信じた ら治る"とか"救われる"とか言ってくる。宗教はも うたくさんです」。けれども他方、人生の最期に多 くの方が、これまでの自分を赦してもらいたいと 願い、死んだ後の不安を抱えています。それは「宗 教 | というよりは人間を越えた存在、全てを包み 込んでくれる存在への求めだと思われます。傾聴 ボランティアという立場では寄り添うこと(水平 /ヨコの関係) までしかできないとお感じのよう ですが、寄り添っておられる先生ご自身が神様 (垂直/タテ)との関係の中で生きておられます。 ですからそばにおられる先生を通して何かが伝 わると思います。少し踏み込めるようでしたら、 例えば、あくまでも"先生ご自身のこととして"ご 自分の信じるものや生きる基盤、価値観や死生観 について触れること等はできるのではないかと

私はこれまでチャプレンとして長く働いてきましたが、いつも問われるのは「あなたはどこに立っているのか?」という問いです。私自身がどこまで神様に信頼しているか、自分自身や関わっている方のことを神様に委ねているのか、が問われています。患者さんのもとに遣わしてくださったのが神様であるなら、弱い私ではあっても神様が用いてくださる、このことに信頼していきたい

と祈りつつ、この働きを続けています。

【質問4】人を越える何らかの存在(神、自然、宇宙など)が命を与えてくれたことへの感謝がタテのつながりだろう。しかしそのつながりが最終的に持てない人の救いはどこに?

【回答】垂直/タテの繋がりの中で召された方々の安らかな様子は、見送る側にも安心を与えてくれます。しかしだからといって、安らかでない人が救われていないとは言えません。

イエス・キリストの十字架の横で「私を思い出 してください」と言った犯罪人は、「あなたは今日 わたしと一緒に楽園にいる」とイエス様に言われ ました。

人生の最期に、神様と人との間でどのようなやりとりがあったかを、私たちは知ることはできません。ですからあの人は救われた、この人は救われなかったと判断することはできません。

私にも切ない思いで見送った方がいます。確かに私たちは、人の心には手出し(コントロール)することはできません。しかし、だからこそそこに祈りがあるのだと思っています。



このほかご質問をお寄せくださった方々に感謝申し上げます。そして何より、霊的痛みへの同伴、スピリチュアルケアに道を示してくださった藤井理恵先生に、心より感謝申し上げます。

藤井理恵先生近著

「たましいの安らぎ

一病院チャプレンの歩みより一」

いのちのことば社 2020 年 10 月出版 ¥1,400+税





思います。



『モリー先生との火曜日』

ミッチ・アルボム著、別宮貞徳訳(NHK出版 2004年)

DPC 所員 ジェームス・サック

死のプロセスを共有しながらも、生きる意味が含まれた本を紹介したいと思い ます。2000年、ニューヨーク・タイムズによるノンフィクション・ベストセラー の一つに選ばれた本でした。その後も4年以上にわたってベストセラーにランキ



ングしていました。3,500万冊以上が販売されています。とても人気があるために映画化もされました。 難病 ALS(筋萎縮性側索硬化症)を患ったモリ―・シュワルツ教授(ブランダイス大学社会学教授) が、死ぬ前に、教え子であるミッチ(著者)に贈った「最後の授業」を記録したものです。ミッチは、 毎週火曜日に 14 回、死の床で行われた「授業」の内容を「人生の意味」というテーマにまとめました。 私はこの本を大学の授業で何回か使ったことがありますが、この本を知らない日本人が多いことが分か りました。この本の内容を説明するいちばん分かりやすい方法は、モリ―の引用を紹介することだと思 います。これらの名言から、死にゆく者の知恵が、生きている私たちに重要な指針を与えてくれること だと感じています。モリーは、死に方を学べば、生き方を学ぶこともできると語りました。彼は最期ま で学び続けることを望む人だったので、自分の死を研究対象にすることを決めました。彼は他の人のた めの生きた教科書となることができたのです。モリーはいかに死ぬかを学べば、いかに生きるかも学べ ると教えてくれました。ここで三つの引用を分かち合いたいと思います。

- ・病気のおかげで最も教えられたことは:「人生でいちばん大事なことは、愛をどうやって表に出すか、 どうやって受け入れるか、その方法を学ぶことだよ|
- ・死の影落とす人生をめぐる一口哲学:「できることもできないことも素直に受け入れよ。過ぎたこ とにとらわれるな。ただし、否定も切り捨ても禁物。自分を許すこと、そして人を許すことを学べ」 ・私にとって意味のある言葉がありました:「多くの人が無意味な人生を抱えて歩き回っている。自 分では大事なことのように思ってあれこれ忙しげに立ち働いているけれども、実は半分寝ているよう なものだ。まちがったものを追いかけているからそうなる。人生に意味を与える道は、人を愛するこ と、自分の周囲の社会のために尽くすこと、自分に目的と意味を与えてくれるものを創り出すこと」

モリーは死ぬ前に珍しいが意義深い「生前葬儀」を行いました。ある日曜日の午後、友人と家族の 小グループが彼の家に集まって一人ひとりがモリーに弔辞を捧げました。泣く人あり、笑う人あり、 ある女性は詩を読みました。

モリー先生の墓石にたいへんモリーらしい言葉が刻まれています: "A teacher until the end." (最後 まで教師でした)ぜひこの短いが金言の多い本を読んでいただきたいと思います。

☆編集後記☆『詩編と祈り』の講座が9月から再開され、まず「Kyrie キリエ」について学びました。その講義の一節 です;"The Kyrie is truly a place where we can come together with other human beings…"(他者と寄り添うことの できる場、それがキリエ) 寄り添い寄り添われ、祈られ支えられたこの1年を感謝いたします。 皆様の新しい年が豊かに祝福されますように。Kyrie eleison(主よ、憐れみたまえ).

発行:日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人:齋藤 衛 181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580(直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp http://www.luther.ac.jp/